

控え目な態度は誤解の種子をまく

新聞『プーチ・プラウドイ』編集局へ
親愛な同僚諸君！

新聞と新聞の明白な改善を極力歓迎する。とうとう、文筆の面が軌道にのった！ おつぎは、経済の番だ。予約者の問題も「非公開」のままにしておくことはできない。予約者の数を公表すべきだ。そうしなければサークル主義から組織性へ、個人的企画から集団主義へと高まっていくことができない。

第22号の明白な誤りを黙殺することもできない。第22号では、ヴィボルグの諸君の正しい決議（ブリヤノフにかんする）とならんで、チューリヒの連中の長たらしい、汚らわしい陰謀的な決議が、編集局に黙認されて掲載されている*。『プラウダ』の言葉は法律である。『プラウダ』の沈黙は労働者をまよわせる。『プラウダ』の控え目な態度は誤解の種子をまく。

ブリヤノフにたいしては「蛇のように賢く^{〜び}」なければならない。編集局は、この賢さからそれた。われわれがブリヤノフをほめるのは、ただ彼が解党派からはなれたためであって、けっして彼が「独立」独歩であるからではない、この点では解党派は正しい。たたかう政治家にとって、正しくない立場をとること以上に大きな危険はない。

ところがチューリヒの連中はブリヤノフの正しくない、偽りの陰謀的立場を支持している！！ しかも、われわれはチューリヒの連中に発言させている。——なぜか？ チューリヒの連中が国外で少数派であることをわれわれは知っていながら、こういうことをするのだ！ 国外にいるもの全部に『プラウダ』で意見を述べさせることができないことを、われわれは知っていながら、こういうことをするのだ！！

ブリヤノフに、彼の立場が誤っていることを理解させ、感じさせなければならない。君は解党派からはなれたのか？ それはけっこうなことだ。

君は平等を提案したのか？ それはけっこうなことだ。

今後はどうか？ 選択すべきときだ。われわれは君の陰謀行為（振子遊び）は支持しないだろう。解党派は君を「独立の社会民主主義者」として迫害している。解党派は正しい。われわれも君を擁護しないだろう。さあ、君にむりのない期限をやろう。この期間は君を援助してやろう（暗黙の援助を、演説によって、等々）。しかし、それ以上は援助しない。選択したまえ（二～四週間後に）、さもなければ、これ以上友人の援助もしない、と。

このようにしか行動することはできない。そうしなければ、ごく近いうちに（ウィーン大会**でも、それ以前にも）ブリヤノフの立場はわれわれに害をもたらすだろう。だから、自分たちは「独立派」を支持するとわれわれに言うものがいでも、それは当然だろう。

編集局は、折をみて、つぎのことを述べなければならない。一、正しいのはヴィボルグの諸君であって、チューリヒの連中ではない。二、在外者の一部（チューリヒ）をのぞいては、だれもロシア国内では「独立派」に賛成しなかったし、今後も賛成しないであろう、と。

これをやる必要がある。

さようなら。新聞を極力改善し、成功をおさめるように！

ヴェ・イ

追伸。チューリヒの諸君は私を支持してくれたし、私を非難したのは、ヴィボルグの連中**だけ**だ、とブリヤノフは一ヵ月後には言うだろう！ そしてわれわれは、ヴィボルグの諸君に**賛成する**一般的、大衆的な**発言**をかちとることはできないだろう。だが、こういう発言は、いまきわめて必要だ。

もし、ブリヤノフの「自由にまかせ」、彼を支持するなら、彼はわれわれに**反対**の立場をかためるだろう。それは、大多数の労働者の意志にそむき、「マルクス主義全体」にそむく罪悪となるだろう。

追伸。『ナーシャ・ザリヤー』第二号が出たら、それをなるべくはやく送ってもらえないだろうか？ 『**プロスヴェシチェーニエ**』でエリ・マルトフに回答するために必要だ。

ふたたび追伸。ロシア社会民主労働者議員団の新聞協力者たちに、この手紙を見せていただきたい。

第 36 卷『新聞『プーチ・プラウドイ』編集局へ』P302～304

1914 年 3 月 23 日以前に執筆

クラコフからペテルブルグあて

ポイント

たたかう政治家にとって、正しくない立場をとること以上に大きな危険はない。だから、機関紙が正しくないことを黙認して、控え目な態度をとることは誤解の種子をまき、曖昧な妥協は最大の敵である。